

人身受け難し：人材と人間

著者	真城 義麿
雑誌名	真実心
号	25
ページ	179-217
発行年	2004-03-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1108/00000609/

人身受け難し

—人材と人間—

真城義麿

はじめに

皆さん、おはようございます。ご紹介いただきました真城です。今日はこちらの宗教講座ということでお招きいただきました。私は大谷高校、大谷中学校に勤めておりましたが、一〇年前、一九九三年三月、一旦退職しまして、故郷愛媛県の瀬戸内海の小さな島、島が三つ集まって村ですが、そこにお寺がありまして、島に帰りましてお坊さんとして生活しようとしばらくやっていました。それまでは中学生、高校生、保

護者の方とお相手していましたが、島に帰ると昔とずい分変わっていました。私が小学生の頃は四千数百人いた人口が、一九九三年には一四〇〇人くらいでした。今は八三〇人です。減り続けています。子どもの数は、私が小学生の時は一学年六〇人の二クラスで、全校生徒三六〇人くらいでしたが、現在では小学校全校生徒で二人、中学生で一〇人。保育園が六人、合わせて三八人が村の子どものすべてです。

コミュニケーション

島へ帰ってショックを受けました。お年寄りの方々が皆、共通して同じことをおっしゃる。この村は全国三二〇〇余の市町村の中で、あることが第二位でした。何が第二位か。人口の中に占める高齢者の比率です。当時、高齢者比率が一番高かったのが、永六輔さんの『大往生』というベストセラーの題材になった山口県の島（東和町）。それに次いで高齢者の比率が高いのが私のところ。そのころで四三%くらいでした。日本の平均が一四%の頃です。今はもう五〇%くらいです。人口の半分以上がお年寄

人身受け難し

りです。お年寄りの方々が「住職さん、私らも若い頃は元気でよかったが、こうして歳をとったらつまらんようになりました」と男の人も女の人も共通して、自分が歳をとったことを、つまらんものになった、値打ちが下がったとおっしゃる。そうおっしゃることにショックを受けました。長生きは人類始まって以来の夢が叶ったわけですから、願いが叶ったのに歳をとったことに自信が持てない。これは困ったなと思いました。その時、私は三九歳だったんですが、人生の残りはお年寄りたちが元氣が出るようなことに賭けようと、いろんなことを村の中でやってみました。「人の世話になる練習をする会」をつくったりもしました。人の世話をするんじゃない、人に世話をしてもらう訓練をしようと。なぜかという、お年寄りになつて自分の身体が思いどおりにならなくなつても、何かをしてもらうと、どうやってお礼をしないといけないか、次に会った時、丁寧に挨拶しないといけない、貸し借りゼロにしたいということが大きな負担となつていて、他人にたのめない。そうじゃなく、世話されっぱなしで平氣、世話しっぱなしで平氣の人間関係を何とか築くことができなかつたかと思ひまして、グループ「だんだん」というボランティア組織をつくつて、そこでいろいろと世話にな

る練習をする。うまくいったり、いかなかったりでしたが、そんなことを四年間くらい島でやっていました。

また兵庫県のある特養、介護が必要なお年寄りのための老人ホームに毎月一回、お話に行っていました。そこは一人で生活できないお年寄りが五〇人ほどおられる。皆、世話になる、手間をとらせる、そうしてもらわないと生きていけない人たちです。毎月のようにそういう人たちと顔を合わせ、村の中でもいろいろやっている」と「自分はいろんなことに対してずいぶん思い違いをしていたな」ということに会おうわけです。たとえば「平等」ということを間違って考えていました。「人間の値打ち」ということも全く間違って考えていたことに気づくわけです。

人の世話になる練習をする会、グループ「だんだん」もやってみると面白いです。入会する時に「あなたのできることをリストアップしてください」。自分でなかなか書けない人は世話人がいて、その人が聞き取りで書く。「針と糸で縫えますか」「車の運転ができますか」「このくらいは歩けますか」「着物がたためますか」「自分で料理がつくれますか」「新聞が読めますか」。いろんなことを聞いて、あれができる、これ

人身受け難し

ができる。そうすると「歳とつてつまらんようになったな」という人たちが、まだできることがいっぱいあるんですよ。「してもらいたいこと、できないこと」も書くわけです。「歩くのがうまくいかない」「仕事をする気はあるが、家からミカン畑に行くことができない。そこまで連れていってくれば、草取りもできる」。そういう人がいますから、キャリングサービスがあつて、車の運転のできる元気なおじいちゃんに頼んで、時間を決めて畑までおばあちゃんの送迎をする。おばあちゃんの中でも、早起きができて、電話がかけられる人だったら「モーニングコールサービス係」をやつてもらおう。そうすると、二〇代の奥さんが、明日、朝、五時に起きないといかんという時に、目覚まし時計で起きてもいいんですが、そこはいろいろと活性化するためにやっているわけですから、世話人に「明日、朝、五時に起こすことを頼んでください」。そうするとね、コーディネーターの人が、二〇代の人とたとえば七五歳の人で、今までちゃんと会話したことないだろうなという組み合わせを考えて、こっちのおばあちゃんに願ひする。

「おばさん、誰々さん、知ってる?」「知ってるよ」「電話番号何番なんやけど、明

日の朝五時に電話かけてあの人起こしてくれる？」「いいよ、わかったよ」。こういうことになるわけです。そうすると五時が待てずに四時半から、そのおばあさん、電話の前で待つてゐるわけです。五時になるかならんかの時、パツと電話をかけて「誰々さん、朝よ、起きて」。早ければ一回、遅くとも三回そういう経験があれば、その二人は今まで一度もまともに話したことなどなかった人たちですが、他人事でなくなる。お札を言うとか、言わないとか意識しなくても、道で会うとおばあちゃんの方から話しかけてくる。「私は実は、この村の中では言つてないけど、ほんととは鹿児島出身なのよ」とポツリと言いだしたり、「私は、ほんととはバツイチなのよ」と打ち明け話をする。「前の亭主が浮気者でね」という話が始まる。

そういうのを見ていて気がついたことは、よく全国あちこちで過疎地だと言いますが、人間が少なくなることが過疎ではないんですね。言葉のやりとり、人間関係、コミュニケーションや挨拶の交し合い、ちよつとしたお世話のし合い、そんなことがなくなっていくのが過疎であつて、過疎というのはコミュニケーションの過疎のことなんだ。人間が減つていこうが、お年寄りが増えようが、そこにさまざまなやりとりが

人身受け難し

あれば、ちっとも過疎だと嘆くのではなく、結構楽しい社会ができあがっていくのではないかということも、そこで経験しました。

「平等」を勘違いしていたことも、気づくことになりました。平等は皆が努力して、よく勉強して、譲り合ったりしながら獲得していく、積み上げて、ここまでいったら目標達成して平等になろうと思っていました。実際は大間違いでした。もともと私たちは全員平等に生まれているんです。もともと平等なのをそれぞれ自分の都合を主張し、自分の浅知恵でいろんなことを計らい、計画し、差別の世界に私たちがしていただけのことで、もとへ戻れば平等だ。何が平等か。お年寄りとのやりとりの中でも思うわけですが、皆、弱いもの同士、すみからすみまで何でもできるといふことのない者同士ということが平等なんですね。歳をとる者同士、病気になるしなければならぬ者同士、もつと言えば死ぬ者同士です。ここにいらつしやる皆さんは若いけど、この中で「私は例外的に死にません」とい人は一人もいないんです。一人の例外なく皆、死ぬ者同士です。

今、あちこちでさまざまな殺し合いが起きます。自爆テロも大変悲惨なことです。

殺さなくても殺された人は皆、死ぬ人なんですよ。殺した側のその人も死ぬ人です。悲しいかな、死ぬ人と死ぬ人が、殺したり殺されたりしています。殺されなくても死ぬ者ばかりです。そのことがはつきりすれば、もつと違う社会が開かれてくるのではないかと思います。

日本という国は「歳をとったらつまらない者になった」と思わせるような何かがある。自分で自分をそんなに卑下することは思いたくないから、本心ではないかも知われないが、若い人に向かつては「私なんて、歳とって厄介者になってしまつて申し訳ない」と言わなければならないような空気がありますね。その正体は何だろうというろ考えたわけです。そんなことを四年間やっていました。三九歳から四三歳までやっていました。四三歳になった時、「大谷高校の校長になれ」と言われて、京都に単身赴任で来て、これで七年目です。行ったり来たりしています。田舎のボランティアの方はうまくいかなかったりしていることもあって、お年寄りの方々に「私はあなたたちのために自分の人生の後半は捧げます」と約束したのにウソをついたようなことになって申し訳ないですね。

人材―人間の価値

人身受け難し

校長になってみて、お年寄りたちと一緒に生活をしたことを通して、もう一回、中学生、高校生の前に立ってみると、同じことだなと思いました。それは何か。今日、お話する「人材」ということです。私たちの国は資源がありませんから、いろんなものを使える限りの資源を徹底的にいい製品にして、品質の高いものにして輸出するところが一〇〇年以上続いているわけです。日本は世界でも最もすばらしい工業製品をつくる国になりました。今は情報とか新しい段階に入っていますが。工業製品のすばらしいものは何か。経済的合理的に極めて品質の高いものをばらつきなく、「これはいいが、このテレビは映らない」ではだめなわけです。間違いなくどのものも必ずいい品質で揃っている。そういう高品質の大量生産に成功した国です。それがいつの間にか農業生産物にまで適用されるようになって、イチゴも同じ寸法で同じ方向を向いて並んでいる。キュウリもそうです。今、少し反動も出ていますけど。

そのうち、人間までそんなふうに育てるイメージになってきました。会社にとって社員はどうであるべきか。こういうことができる人。私たちは人間に生まれているにもかかわらず「人材」という言葉に代表される「材料としての人間」と見るクセがついてしまった。材料は何かになって初めて値打ちがあるわけで、つまり役に立って初めて値打ちがあるという人間観、そういうことが身にしみついてしまいました。そのことが私たちを大変窮屈にしまっていたり、今までできていた何かがちよつとできなくなった時、自分の身の置き場所がなくなつて困つてしまう。「歳をとつてつまらんようになった」というお年寄りも、若い頃はどうかだったか。元気で、いくらも仕事ができた。その当時のお年寄りや身体の不自由な人、さまざまな病氣の人を見て「あんなものは厄介者で、いなきやいいのに」と思っていたかもしれせん。「あんな人、生きてる値打ちありませんぞ」と思っていた人たちが、今、歳をとつて自分自身の身体一つが思うようにならない人間になってしまったわけです。今まで「必要のない人間」と思っていた対象に、自分自身がなつてしまった。そうすると、自分をどこで納得させればいいか。ニヤニヤ笑いながら「つまらんものになりました。ご厄介

人身受け難し

様で、皆さんの税金を無駄遣いさせてしまいました」と言わなくてはいいかんように思わせてしまったのではないかと思います。

私たちは人材として役に立つことはとても大事なことで、皆さんが勉強されているのもそういう付加価値を自分につけようと毎日、勉強されている。それは大事なことです。もっと大事なことはその前の本体価値ですね。皆さんが自分に生まれた、私が私に生まれたということです。人間に生まれたということです。そのことがどれほどのことであるか。そのことだけで「人間の値打ちの九十何%かは実現している」と言えるような私になるのかどうかです。そんなことをお話したいと思います。

先程、学長先生が一二月八日はお釈迦様が覚りをひらかれた、成道された日だとおっしゃいました。皆さん、覚りをひらいたら、ものがどんなふうに見えるか、考えたことがありますか。覚りをひらいて仏様になった。仏様の目から見ると、ものごとはどんなふうに見えるのか。どういうふうに見えるようになった時、覚りをひらいたと言うんだろう。それは人間で言えば「どの人もすべて尊い、どの人も一人残らず、全員が尊い人だ」と見えるようになるんですね。どのものもすべて大事なものと見える。

さまざまに起こっていることもそうです。自分にとって都合の悪い嫌なこと、歳なんかとりたくないと思いますが、歳をとることも私にとって大事なことなんです。そこからいっぱい学ぶことができる。それは今まで見えていなかったものを見させてくれるような大事な経験なんだというふうに、私に与えられる一切のもの、私にかかわりのある一切のものを、尊いものとして見る事ができるような眼がひらかれた、それを「覚りをひらいた」というのかもしれないと、この頃思います。それはそんなに特別なことではないのですね。超能力を身につけるとかではなく、私が今まで嫌っていたり逃げようとした人もモノも、寝たきりになって、自分で何一つできない人も尊い人なんだと見ることができる眼がひらかれた時に、覚りはひらかれたと言えるのかもしれません。

ヤックン

私たちは元気で働いて、自分の活動がお金に換算され、それが高い金額になればな

人身受け難し

るほど値打ちが高いと思います。では生まれつきさまざまな障害を抱え、自分でできることのない人には値打ちがないのだろうか。広島県呉市に滝本誠海さんという先生がおられました。お寺の住職ですが、三十数年間小学校の先生をなさいました。最初の一年間は普通の小学校の先生ですが、一年の間に考えるところがあつて、一旦、休職され、大学で勉強をし直されて、後はずっと障害をもつ児童の特別学級の生徒たちの先生を三六年間されました。さまざまな教育賞とかも受賞されました。その方と親しい方のお寺が私の故郷の近所にありまして、そこへ時々お話に來られたり、その住職が呉のお寺にお話に行かれたり、いろいろと滝本先生とのやりとりがあつた。今年一月、滝本先生のことが話題になった時、友だちの住職がこんなことを言うんですよ。滝本先生の奥さんの姪で、東京に嫁に行ったんだけど何年たっても子どもが生まれない。そうこうしているうちに七年目に子どもが授かる。大変にうれしい電話をするわけです。「おじちゃん、子どもが生まれるの」「そうか、生まれるのか、よかったね」「そうなのよ」。生まれて、また電話があつた。「男の子が生まれました。ヤストシと名前をつけました」「そうか、ヤックンと呼ばしてもらおうかな」。それから数か

月もしないうちにまた電話がかかって、奥さんが電話を受けて電話口で泣き始めた。「どう言っているかわからないから、あなた、電話聞いてあげて」と言われる。先生が姪に聞くと「おじちゃん、私、死にたいの。あの子も殺して私も一緒に死にたいの」「どうしたの、あんなに喜んでいたのに、何があったの。ゆっくり話してごらん」。生まれた子どもがなかなか成長しないそうです。保育器に入っているけど、よくなっていない。産婦人科で「原因がわからないから専門の小児科医に見てもらいなさい」と言われて、あちこちの小児科を回るが、どういう病気がわからない。ある先生が「ひよつとしたら」ということで「東京大学の小児科の教授を訪ねてごらんさい。こういう症状のことを話題にしていたことがあるから」。東京大学付属病院に行ったら診断がつくわけです。「ウェルドニツヒ・ホフマン病という病気だ」と言われた。脊髄神経が損なわれていく病気です。呼吸筋を含めた身体中のすべての筋肉など動く力はたらく力は全部その脊髄神経のはたらきだそうです。その先生も「この病気は発見されてから九ヶ月の平均余命だ。欧米の著名な内科の教科書には、呼吸器を使用していたずらに延命するのは、本人にとってもお父さんお母さんにとっても辛いから、あ

人身受け難し

まり延命すべきでないと言われている病氣なんですよ。お母さん、どうされますか。もうしばらくするとこの子は自力で呼吸ができなくなります。肺を膨らませたり、縮めたりすることができなくなります。レスピレーターという人工呼吸器をつけないと息もできなくなる」。そういうことを告げられるわけです。それで先生に電話してき

た。

この子は自分で瞼を開くこともできない。朝、お母さんが「ヤックン、お早う」と瞼を開いてあげると目が開く。開いたら開いたままですから夜になると「ヤックン、おやすみ」と瞼を閉じてやらないといけない。何一つ動けない。こんな子どもが生まれて、この子の人生に何か意味があるんだろうかと、お母さんからするとわからないんですね。滝本先生もかけてあげられる言葉がない。先生は「私もどうすればいいかわからないけれども、殺してはならない。あなたが死んではいけない。生きてくれよ。親鸞聖人がこんな言葉を私たちに残してくださっている。『本願力にあいぬれば、むなしく過ぐる人ぞなき』。そういう言葉があるから、それを信じなさい。あなたは間違ひなくわが子を拝まずにはいられない日がくるから、一生懸命その子の世話をしな

さい」と言うわけです。姪の人は本願力と言われても何のことかわからない。「おじちゃんと言うこと全然わからない」と電話を途中で切ってしまう。だけど思い直して、その子どもにレスピレーターをつけて一生懸命に世話をする。ほんのわずかずつですが、成長する。筋肉を動かす神経が全部やられていますから、指一本動かすことはできない。瞼一つ動かすことができない。寝返りをうつことも首を動かすこともできない。ところがね、ヤックンは九ヶ月と宣告されたんですが、それから後も生き続ける。お母さんは海に行つて海の写真をいっぱい撮ってきて、それをパネルにしてヤックンに見せる。大きなひらがなの五〇音の表をつくつてヤックンに言葉を教える。しゃべることもできない。ヤックンは見えているかもわからない。聞こえているかもわからない。何の反応もないですから。けれどもお母さんは一生懸命そういうことを始める。海の写真を撮ってきて「ヤックン、これが海よ。広いのよ。海っていう言葉があるのよ。これがウよ、これがミよ。海よ。広がってわかる？」。山の写真を撮ったり、桜の写真を撮ってくる。何の反応もない。わかっているのか、聞こえているのか、見えているのやら。私たちの普通の常識で言えば、役に立たない、値打ちのないヤックン

人身受け難し

なんですけどね。

ところがね、お医者さんもわからない、看護婦さんもわからないけど、お母さんが、あることを発見するんですね。ヤツクンは身体中が動かないと思っていたけど、ほんの何か所だけ、一ミリほど動くことを見つけた。目の玉、眼球が一ミリだけ動く。大発見をした。それでお母さんは今までヤツクンに話しかけたことを確認するわけです。「ヤツクン、わかる。そうだとしたことだったら、あなたの目を一回だけ動かして。

違う時は二回動かして」。何回も教えるわけです。「ヤツクン、わかった?」。目が一回動く。それからまた、お母さんはいろんなことを教える。そうこうしているうちに余命九ヶ月と診断されたヤツクンは一〇年以上生きる。またある時、誰にもわからない、お母さんにしかわからない。ヤツクンが何かを表現したがっていることがわかる。五〇音の表を持ってきて「ヤツクン、何か言いたいことがあるの?」。ところが言葉を発することもできない、手を動かすこともできませんから、お母さんが一字ずつ確かめる。「言いたいことの最初の言葉は何なの。アなの」。違う。「イなの?」「ウなの?」「エなの?」「オなの?」。その時、一回だけ動く。ヤツクンの最初の言葉の始

まりは「オ」だとわかった。また一からやり直し。「その次の言葉はアなの？」。二回。「イなの？」。二回。あいうえお全部いったけどみな二回です。二行目の「カなの？」。この時、一回です。二文字目がね。三文字目は最初の「ア」のところで一回。察しのいい人は見当がついたかと思いますが、一時間半くらいかかって、ヤツクンの言葉を一言ずつ確認し、休憩して、文ができあがるわけです。どういう言葉だったか。

「おかあさん、いのち、ありがとう」という言葉だった。お母さんは感動してうれしくて、うれしくて。お母さんとしては生まれてウエルドニツヒ・ホフマン病だとわかった時、「この子を殺して私も死のう」と一度は考えたわけですから、母に殺されそうになったわが子が、生まれて初めて表現できた時、「おかあさん、いのち、ありがとう」と言った。お母さんも「ヤツクン、ありがとう」と。実はこのお母さんはヤツクンが生まれてからずっと育児日記をつけていた。家に帰ってもうれしくて、今日は育児日記に何を書こうかと思うけど、感動で手が動かない。書こうと思っても書けない。何かの拍子にノートに「あ」と書いた。後は一気呵成に「ありがとう、ありがとう、ありがとう…」と。またページめくって「ありがとう…」。止まらなくて、最

人身受け難し

後のページまでいつてふと我に帰ったら全部「ありがとう」で埋めつくしていた。滝本先生に電話をかけて「おじちゃんが言っていたこと、本当だった。私はこの我が子を拝まずにはいられない」。そういう出来事があつたということを友だちの加藤さんに話をされた。それを僕は聞いたんです。

「人材」は役にたてば価値がある。役に立つかどうかだけで価値をみていこうとするなら、ヤックンには価値は見えない。ところがその何もできないヤックンがお母さんのいのちを輝かせ、お母さんからすれば、ヤックンを拝まずにはいられないような尊い存在に見える。ヤックンから見ても、お母さんは尊い存在であるということになっていくわけです。

「都合」という物差し

何とか自分の商品価値を高めないといけない。それは大事なことです。しかしちょっと振り返って、お年寄りやヤックンのことを思い出して考えてみると、人材という

のは「誰かにとって都合のいい人」という意味なんです。会社の社長から見て「この人はいいい人材だ」というすばらしい人が、家に帰って奥さんから見て「うちのダンナはいいい人材だ」となるかどうか。この頃、あちこちでサラリーマン川柳とか流行っていますが、面白い川柳がありますよ。北海道新聞にのったものです。「粗大ゴミ、朝に出しても夜帰る」。社長からすると「この会計課長はすばらしい。この人がいないと会社はなりたたない」。奥さんからすると「掃除の時くらい退いて」。そういうのはたくさんあるんですよ。気分転換に紹介しますと、川柳の世界ではお父さんはボロンチョですね。「父さんを、立てておだててこき使う」「父親の意見は聞いて従わず」「期限切れ、まずは夫に出してみる」。お父さんがつくったものもあります。「なんでやねん、娘ブランド、わしバーゲン」。また「会社より家でストレスためる父」「ごみ出しは曜日忘れず、旦那様」「言い負けて父は新聞持つて去る」「妻と子の話題に入る術もなし」「あら父さん、いたと言われた二二時」「単身を終えて帰れば湯飲みなし」「定年し、今度は妻の部下となり」。極めつけは家庭の中での力関係。皆さんのところはどうか。「ランキング、母、子、犬、猫、父、金魚」。学校や会社ではペコペ

人身受け難し

コされながら、家に帰ると金魚よりちよつと上。犬にもばかにされ、猫にもばかにされ、娘にもばかにされ。そういうお父さんがつくった川柳で「こんな家、出ていつてやる、ちよつとだけ」「おい伴、小言聞くとときや、ちとかがめ」。人材は「ここではすばらしいけど、ここではだめ」というふうに一貫していません。

今、話題になる「よい子」もそういうところがあるんじゃないですか。皆さんもよい子の集団だと思えますけど、学校でよい子が必ずしも家でよい子とは限りません。逆もあります。お父さん、お母さんの前ではよい子でも、学校で乱暴な子がいます。勤めている学校の生徒を見てもそう思います。「期間限定」「場所限定」なんです、人材とかよい子は。それは望まれるモデルを想定し、それに自分を合わせていこうとするからです。人材の世界は完全に差別の世界です。物差しがはっきりしています。人を使うその人の都合の物差しで序列がつく。いい人材はいい条件で優遇しましょう。人材派遣会社のコマーシャルを見ていても嫌なのがあります。人材は三種類あると。宝物のようにすばらしい「人財」。そこにいるだけの「人在」。その人がいることが皆の足を引っ張る「人罪」。こういうふうに、ある人材会社のコマーシャルにあります。

た。「うちの派遣する人材は『人財』だ」と。こんなふうに人間を価値付けするわけです。人材は賞味期限があつて期間限定です。いい間がいいが、だめになったら即、捨てられてしまう。いくら会社ですばらしいといつても家に帰つてすばらしいとは言えない。家のことはやるけれど地域のことはやってくれない。「都合」という物差しで価値づけをしてしまう。私から見ても、「いい人」でも、他の人からみたら「いい人」とは限らない。よく思われなくて、嫌われたくないために、したくないこともしたりする。人材は、その人を使う人の「都合」という物差しで序列がつく。順番がつくということです。

代わり

人材の問題性の二番目は都合に合えば誰でもいい。「あんたがおらんかったらこの会社は回らん」と言いますが、その人がおらんようになれば誰かがパツと入る。誰でもいい。その人でなければならぬということはない。

人身受け難し

人間は違いますよ。皆さん方の代わりは今日いだけではない。今までもいないし、これからも一度もない。私たちは全く代わることができない。代わることができないというのは、代わりがあるとかないとかという考え方そのものが成り立たない。そういうものとして生まれている、皆さんは。今朝も、目が覚めると寒い。布団から出たくない。布団から出たくないけどトイレには行きたい。誰か代わりに行ってくれんかなと思うけど、そんなわけにはいかないわけで、私の身体に起こったことは全部自分でしないといけない。おなか为空いたけど、手が放せないから誰か食べておいてと代わってもらうことはできません。眠ることもそうです。人材は誰でもいい、代行可能。都合に合えばいい。ですが、人間は絶対に代わりがない。代わりがないということ、一人ひとりの中でも、過去の自分と今の自分を入れ換えることはできない。過去の自分を塗り替えることはできない。私たちはいつも今という瞬間だけを生きているわけですから。そして今は過去にきちんとつながっています。未来にきちんとつながっています。今現在の他の人たちのいのちともつながっています。人材の二番目の特徴は「代行可能」。都合にあえば誰でもいい。それに対して人間は代わりがない。

私たちは誰とも代わってもらわなければならないものとして生まれてきて、誰とも代わってもらえないものとして死んでいく。代わりのないものとして行ったり来たりしながら生きていく、生活していくことしかないですね。（「独生独死独去独来」といいます。）

都合という物差しで見れば必ず差別の世界になります。しかし人間は違います。人間はどの人もみな尊い。「完全な平等」です。寝たきりになつたくらいのもので、人間の尊厳が損なわれることは絶対ありえない。ボケとか、目が見えなくなつたこととか、人間の尊厳から言えば、ひとかけらも損なわれることはありません。みな尊い。ここにいる皆さん一人一人が徹底的に尊い。その尊さを自分で見つけることができずにいる人もいる。親鸞聖人の教えで言うと、少なくとも仏様は私たちのことを尊い人と見てくださる。約束してください。あなたたちの誰一人も捨てないと。仏様から私たちは絶対に捨てられることはないのです。親鸞聖人は阿弥陀仏のことをこんなふうにおっしゃっています。「十方微塵世界の 念仏の衆生をみそなわし、撰取して捨てざれば 阿弥陀と名づけたてまつる」。阿弥陀という仏様は捨てない仏様です。どの

人身受け難し

人も捨てない。どの人生も捨てない。どの一時も捨てない。私たちは、自分で自分の人生を捨てたりする。「こんなことだったらしなきゃよかった。こんなことになるんだったら、このために使ったお金も勿体ない、時間も勿体ない。手間も勿体ない、エネルギーも勿体なかった」と言って捨ててしまったものの中に、私たちが学ばべきとても大事なものがある。私自身が捨てようとしているものをさえ、仏様は「そこに尊いものがあるよ。捨てちゃだめだよ」と呼びかけられていることを知っておいてください。

役立っ

人材というのはいいところだけを見る。いいところだけで勝負する。悪いところを持ち込んでくれると困るという世界です。これが人材の問題点の三つ目です。できてあたりまえの世界です。満点主義です。できなかったらどうするか。本人の能力が足りなくてできなかったら、上司は「努力と根性で補え。せめて姿勢で示せ。やる気だ

けでも出せ」。それでもできなかったらどうするか。言い訳をする。「私のせいでできなかったのではありません。こうで、こうで」と。それで認めてくれればいいのですが、認めてくれなければ「じゃ、あなたはもういらない」となります。人間はできないのがあたりまえなんです。思い通りにならないのがあたりまえなんです。

私たちは人間に生まれたということです。そして「思い通りにならない人生を歩みなさい」と、人間に与えられた生きる場所（世界）のことを「娑婆（しゃば）」と言います。人間は完璧な人は一人もいない。残念ながら、未熟で生まれてきて、未熟な人生を送って、未熟なまま死んでいかないといけない。自分一人で何ひとつやり遂げることができないものとして生まれてきている。しかしだからこそ、私たちは優しさ、共感する力、助け合う気持ちを同時に備えている。なぜか。一人で生きてくことができない者として生まれてきているから。一人で生きていくことができないものとして生まれてきているということは、同時に助け合いながら生きていくように生まれてついているということ。ですから誰かが困っていたら、私も何か辛い。いのちはつながっているんです。イラクで誰かが亡くなった、悲惨な殺されかたをしたという報道を

人身受け難し

聞いた時、今回の奥さん、井上さんのように日本人であれば特別な感情が動くのはわからないでもありません。しかし現地の人が亡くなる、イラクの人が亡くなる、アメリカ人が亡くなる、スベインの兵隊が亡くなるというように、私と直接関係のない人が殺された時、私にとって何の利害もないはずなのに、なぜ私は辛くなるのだろうか。なぜ私の中に悲しい気持ちが起こるのだろうか。なぜ私はやりきれなくなるのだろうか。私の知恵、理性、理屈ではわからないんですが、私たちがお預かりしているいのちそのものは、つながっているということを感じている、知っているわけです。つながっているいのちのどこかが損なわれると自分も辛いんですね。心の底の方で、辛いと感ずる。

できてあたりまえだと、できなくなったら捨てられてしまう。これが人材の世界です。どんなにすばらしい人であっても、そのことができるということで雇われている人は、そのことができなくなったら捨てられてしまいます。人材にしがみつすぎる」と「定年し、今度は妻の部下となり」というように肩書がなくなった時、居り場所がない。人材としてだけ生きていたら、人材の制限が外れて「人間に戻れ」という時、

人間としてどうして生きていいかわからない。そんなことになりはしないか。役に立つ間は大事にするが、役に立たなくなつた途端に差別し、排除するのが人材の特徴の四番目です。都合のいい人を集め、都合の悪い人を排除する。皆さんが勉強されている歴史はある種、そういうものがありますね。権力を持って体制を維持していこうとする人はそういうふうに動くものですね。今もそういうところがあるのではないかと思います。

私たちはどうしても付加価値で人を見てしまう。それも大事なことで、自分に与えられた能力、資質を惜しんではなりません。全力で開花してもらわないといけないと思います。だけどそれがすべてではないということです。S M A Pの「世界に一つだけの花」が流行りましたが、あの歌は素晴らしいけど不満なこともある。あれは咲いた花だけ相手にしています。花が咲く前に枯れてしまった植物も尊いんですよ。それと見逃してならんのは、どういう大地に育っているか。自分の花を咲かせるためにどういう大地にいるのか。自分の花を咲かせるために支えているもっと大きな力がある。私たちはそういうものの上に安心して自分というものを出すことができる。

人身受け難し

私たちは自分の目からは他の人の嫌なところが目についてしまう。嫌いなところが目についてしまうことになる。だからいいところだけを見せながら人間関係をつくってしまいがちです。先生の前では先生に嫌われないように、親の前では親に嫌われないように、友だちの前では友だちに嫌われないように。そうするうちに使い分けに疲れててしまうこともあります。あるいは本当の私はどこにいるんだろうと困ってしまふこともあるかもしれませんね。常に周りの期待感に合わせていくだけで、私がない。「私が私の人生を生きているということをしたことがない」となってしまわないかと心配します。

みんな

私たち、特に日本では「みんな」という言葉に弱いと思いませんか。「みんながやっている、みんながしていない」「みんな」と言われると弱いですね。日本人の「みんな」に弱いというのを笑った有名なジョークがあります。タイタニックのジョーク。

タイタニック号という、当時のヨーロッパ文明の粋を集めて、すばらしい船をつくった。進水式があつて処女航海に出る。オーナーは世界中の大金持ちに招待状を配つて貴族や金持ちたちが集まつて船に乗り込むわけです。日本人もたくさん乗っていた。音楽家の細野晴臣さんのおじいちゃんもタイタニック号の生き残りです。見栄の固まりですから、ならし運転で行かないといけないのに、オーナーは「もっとスピードが出るはずだ」と設計者を困らせる。船長は仕方なく言われた通り、準備できてからスピードを出そうと思つていたのに、最初からすごいスピードで飛ばすわけです。どのくらいのスピードで舵を切ったら曲がるかということが実感できない状態で走つていた。しばらくして氷山に出会う。避けきれんと思つて舵を切るけれども接触してしまつて浸水し、あれよ、あれよという間にタイタニック号は沈没する。見栄の固まりでつくつてゐるから、救命ボートは少ししか載せていない。お客さんの全員は助からない。僅かの人しか助からないようになってゐる。それで船長は船員を集めて「いよいよだめだ。お客さんを救命ボートに乗ってもらう。こういうルールで乗せたいから守りなさい。優先順位としては第一に子ども、次は女性、余裕があれば男性に乗つても

人身受け難し

らう」。世界中からいろいろな人が来ている。イギリス人はイギリス人で固まっている。船員がボートのところに行くとき厚かましい男どもがすでに乗っている。この人たちに降りてもらわないといけない。どう言って降りてもらおうかというジョークなんです。

イギリス人に向かっては「あなたたちはジェントルマンではなかったのですか」。イギリス人は「レディファーストだ」と女性と乗り換える。次のボートにはドイツ人が乗っていた。「男性が降りていただくのがルールになっております」。ドイツ人はルールに弱いですから、「ルールなら仕方ないな」と降りる。今度はアメリカ人が乗っている。アメリカ人に何て言うか。日本の外交官がイラクで亡くなった時、アメリカ人の発言の中に一杯出ていましたね、「ヒーロー」という言葉が。アメリカ人はヒーローという言葉に弱い。「あなたたち、ヒーローになりたくないのかい」。こう言われると「女性や子どもを救ってヒーローになろう」と降りた。次に日本人が乗っていた。この人たちはどう言ったら降りるか。簡単だった。日本人には「みんな降りたよ」と言うと、全員降りた。こういうしょうもない話ですけど、それくらい「みん

な」という言葉に弱い。

ウォルフレンという政治学者が十年くらい前に『人間を幸福にしない日本というシステム』という本を毎日新聞社から出しました。その中でウォルフレンは「日本で改革と言っているが、できるはずがない。日本では一人ひとりが『これはおかしい、これは変えないといけない』と言いながら、だけど『みんながやっているから仕方なくやらざるをえない』といってやるんだ。みんながやる限り、自分だけ変えることはできない。だからいくら言っても改革はできっこない。日本人ほど『みんな』という言葉に引きずられる人たちはいないよ」と笑われているわけです。ふと考えると、「常識」「普通」「流行」「みんな」という言葉の中でしか生きていない。「私はどこにいるんだろう」ということになっていなければいいなと思います。

見えなくなる

私たちも皆さん方も一生懸命勉強します。勉強すれば見えないものが見えてくるこ

人身受け難し

ともあるんだけど、逆もあるんです。そのことも知っておいてください。大谷高校に勤めるようになった二年目、つまり今から二十五年くらい前、ある私鉄の電車の駅での話です。すでに切符は自動販売機で買うようになっていました。駅員さんは改札のところの一人いるだけ。私は切符を自動販売機で買って改札を通ってホームに入った。六十歳くらいの女性が駅に入って自動販売機の前に立たれた。切符を買われるのかな。自動販売機をじっと見て買わないんです。あちこちときよろきよろ見ている。何か探しているのかなと思いました。そしてその駅に一人しかいない駅員さんのところに来る。駅員さんは仕事をしていました。一心不乱に帳面に何か書いていました。女性が駅員さんに何か言ったんです。よく聞こえない。駅員さんの声は聞こえた。「おばちゃん、ごめん。ちよつと手が放せんのや。悪いけど、目が見えるんやったらあそこに料金表が張ってあるから、それ見て切符買うてえな」。おばさんは料金表のところに行くんですが、それを見てそのまま駅から出ていく。何かわからない。私は電車が来たから乗ったんです。次の日、おばさんがいたところを改めて見ました。すると駅名は全部漢字で書いてあって、漢字が読めない人には切符が買えないシステム

です。自動販売機をつくる人も、駅のことを考える人も、学歴のある勉強した人たちです。駅員さんは「おばちゃん目が見えるんやったら見て買うてえな」。目が見えることは漢字が読めることとイコールなんです。何の悪気もない。漢字が読めない人が世の中にいるということを、思ったことがない。自分が読めるから。今は違います。どの駅にも点字の料金表、平仮名の料金表が張ってあります。その当時はなかった。私はその時、ショックを受けました。学校の教員として、駅員さんみたいな人をいっぱい育てているんやなと思いました。勉強すればするほど見えてくる世界もあるけど、勉強すればするほど見えなくなる世界があつていいのかなということですね。何らかの事情があつて、本来勉強しなければいけない時期に学校に行くことができなかった。日本人だと思って日本語をしゃべれると思っただけ、アジアの他の国の人かもしれない。私たちが漢字が読めることのために、見えないことが起こってくるわけです。

皆さんが自転車に乗っている時、前を歩いている人が邪魔だからチリンチリンと鳴らします。よけてくれない。横着な人やと思うけど、チリンチリンと鳴らした時、私の前を歩いている人は耳が聞こえる人とは限りません。道路を歩いていると、道路に

人身受け難し

はみ出して洗濯物が干してあつたりします。そこを白い杖で探りながら歩いている人は顔をぶつけるわけです。それは私たちが目が見えるから、そんなことが起ころうなどとは、よもや思いつきもしない。勉強もし、目も見える。それはある意味で人材としてすばらしいけれど、そういうものを抜きにして、一人ひとり人間として尊いものとして大事にしあう世界を、私たちがちゃんと考えないといけない。そんなことを思いますね。

お母さんが「娘にはあの学校に行ってほしかったのに」と思っていた。しかし娘は滑り止めと言われる学校にやっと受かった。それでも本人は納得して、その学校の制服を着て毎日喜んで行っている。学校の帰りに向こうからお母さんが来るのが見えた。道をはさんですれ違う。娘はお母さんに手を振る。お母さんは知らん顔をして通りすぎる。晩御飯の時、「お母さん、学校の帰り、手を振ったのを気がつかなかったの?」「お母さんはわかってたんだけど、誰々さんと一緒にいたから」。その女の子は次の日から制服を着ることかできなくなる。「お母さんは私が落ちこぼれの学校に行っていると思っているんだな。そのことを友だちに知られたくなかったんだな。私が

この学校に行くことが制服を着てお母さんを苦しめてたんだな」と思う。自分が納得していたことが全くできなくなる。私たちが自分の都合でものを見てしまう時、たくさんの人を傷つけたり、生きることをへこませてしまったりということになってしまふことがあります。

相 関 関 係

今、世の中で気になっていることは「パブリック」ということです。日本では公（おおやけ）は言葉の通り、大きな家とか権力者とか、お上から下りてくるものと思うから、公衆便所といってもきれいに使わない。ヨーロッパでパブリックと言うと、そこに住む人たちが皆で知恵を出しあって決めたルール、こういうルールで生きていけば快適だ。ここの場所は皆の共有財産にしよう。そこに私事が入れないようにして、共有することで豊かな生活をしていこうとできあがっていくのがパブリックです。そこに参加する人たちが意識を持って参加しない限り、パブリックは形成され、維持さ

人身受け難し

れることはない。ところが私たちはそういう感覚にはなくて、パブリックの場所で、自分の好きなようにしたい。自分の部屋にいる時と同じように公のところで生きていきたい。食べたいところで食べ、化粧したい時に化粧をする。電話をかけた時に電話し、しゃべりたい時にしゃべる。どんな恰好をしようが「あんたたち関係ないじゃないの」。それはパブリックにプライベートが入っている。それは個性でも何でもない。同じ理屈で難儀なことがある。自分の家のなかでさえ自分を出すことができずに、自分の個室の部屋から出ることができなくなってしまう。家庭というものもプライベートな面とパブリックな面と両面持つているんですが、パブリックの気持ちよさ、そこに対する安心、きちつとした意識とケジメを持つて参加すれば自分を豊かにしてくれる大変大事な場所なんです、そこにプライベートを持ち込むと全体が崩れてしまう。そんなことがあるのではないかと思います。そういうことも考えてほしいと思います。

何年前、イギリスにいった時、びっくりすることがありました。バスの中で、スキンヘッドのお兄ちゃんが、黒い革のシャツでピアスとか鎖をじゃらじゃらつけて、

バスの中の通路で女性とイチャイチャしてた。ところがお客さんが乗ってきて「Excuse me」と言った途端に、イチャイチャしていた二人が真顔になって「Sorry」とパッと譲る。お客さんが通るとまたイチャイチャに戻るんです。何なんだろうと思いました。その二人が僕より先にバスから降りた。降りる時に真顔になって運転手さんに「Thank you, Good Bye」と言って降ります。挨拶して降りる。パブリックとプライベートが身体の中に入っているんだなと思いました。「なんだ、この人たち」と先入観で見ていた自分を恥ずかしいなと思いました。

世の中がどんどん都市化されていて、私たちの都合に合うことが増えた。寒ければ暖かくできる。暑ければ涼しくできる。おながが空けば、いつでもどこでも食べることができるようになる。自分の都合に合えば合うほど価値があると思う癖がついてしまった。人間は思い通りにならないのがあたりまえです。思い通りにならない中でたくさんのことを学ぶ。歳をとって自分の身体一つが思い通りに動かなくなっただけで、見えてくる世界がある。人間は歳とともにすり減っていく知恵と、歳とともに深まっていく知恵と、二種類の知恵を持って生まれていると思います。それが人間だと

人身受け難し

思います。「人身受け難し」というのは、私たちは人間に生まれたということです。「人」ではない「人間」なんです。関係性の中で私たちは生きている。つながりに心ができなければ、どれだけ贅沢になろうが、どれだけ能力が高くなろうが、どこまでいってもそれは安心できません。私たちは他の人を認めて初めて私になれる。他の人の尊さがはつきりして初めて、私の尊いものを大事にできる。相互関係にある。ということで「人材と人間」といことでお話をさせていただきました。どうもありがとうございました。

——二〇〇三年二月九日——